

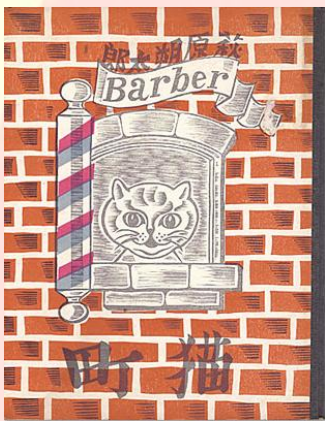
▶萩原朔太郎『青猫』書影 新選名著複製全集近代文学館「一九三三年 新潮社刊」第二詩集『月に吠える』の口語詩の表現をさらに高めた。



▶萩原朔太郎『月に吠える』書影 精選名著複製全集近代文学館「一九一七年 感情詩社・白鳥社」朔太郎の第一詩集。版画家の田中恭吉、恩地孝四郎と制作した美しい詩画集。



▶萩原朔太郎『猫町』一九三五年 版画荘表紙原案は朔太郎。川上澄生の装画、挿画を担当。唯一の小説。下北沢が舞台となった。



▶萩原朔太郎(出典 国立国会図書館「近代日本の肖像」)



日本の近代詩を大きく変えた『月に吠える』『青猫』。

一口語自由詩の確立と名著初版本の魅力

『月に吠える』『青猫』は、萩原朔太郎を日本近代詩の代表的な詩人へと押し上げた代表詩集です。会場では、日本近代文学館刊行『名著複製全集』から、大正期に刊行された初版本を忠実に再現した複製版を展示します。本を芸術作品として捉え、装丁にも強いこだわりを持った朔太郎。その思いが込められた初版本の魅力を複製資料で展示し、その革新的な詩の世界をご紹介します。

朔太郎の憧れの人。そして、生涯の友。



▲ 朔太郎の憧れの人、白原白秋(1885-1942)

白秋と犀星

白秋が主宰した詩誌『朱楽(ザンバア)』に朔太郎が参加しました。白秋へのあまりの憧れから、実質ラブレターともとれる手紙を綴っています。また、犀星とは、朔太郎が犀星の作品に感動したファンレターを送ったことから文通が始まるなどして、互いに作品を贈り合い、生涯にわたる交流を続けました。



▲ 生涯の友、詩人・小説家室生犀星(1889-1962)



終の棲家、世田谷。

朔太郎と『猫町』

1931(昭和6)年、朔太郎は家族とともに下北沢へ移り住み、その2年後、代田に新居を構えて生涯を過ごしました。この終の棲家で生まれた短編小説が『猫町』です。表紙絵は版画家・川上澄生が手がけましたが、その装丁の構想は朔太郎自身によるものでした。作品には、下北沢を思わせる風景や表現が描かれ、主人公が夢と現実の狭間をさまよう幻想的な世界が広がります。世田谷文学館では、ムットーニ制作による自動からくり人形作品「猫町」を鑑賞することができます。※上演作品は時期によって異なります。

近代文学名著の初版本を忠実に復元した「名著複製全集近代文学館」

The Museum of Modern Japanese Literature

東京・目黒区駒場公園内にある、日本初の近代文学総合資料館「日本近代文学館」。1968(昭和43)年、近代文学名著の初版本を忠実に復元した「名著複製全集近代文学館」の刊行開始。1970(昭和45)年、「新選」シリーズを刊行。以降、「特選」「精選」「詩歌文学館」などのセットを刊行。

企画展示「名著複製全集近代文学館 初版本の魅力」

— 名作を彩る初版本の装丁と造本 —

初版本には、作品の内容だけでなく、装丁や紙質、デザインなど、その時代の美意識が息づいています。本展示では、名著を彩った初版本ならではの装丁や造本の美しさを、日本近代文学館が忠実に復元した複製資料で紹介しています。



▲ 展示イメージ。1970年刊行、「新選名著複製全集近代文学館」(写真提供 日本近代文学館)

展示会場
下馬図書館
9/11-12/9
休10/6-8, 11/12

展示会場
下馬図書館
10/9-12/9
休11/12

本を読む楽しさを届けに、移動文学館がやってくる。



W700×H1260 ▲ 掲出バナーイメージ

世田谷文学館 出張展示「移動文学館」
詩人 萩原朔太郎
SHIJIN HAGIWARA SAKUTAROU

日本の近代詩を代表する詩人・萩原朔太郎の代表作の解説やブックガイドを掲載。詩壇に衝撃をあたえた第一詩集『月に吠える』所収の「竹」、晩年を過ごした世田谷で書かれた短編小説『猫町』などの作品や朔太郎が夢中になった音楽や写真についても紹介。

講演会 会場案内

三茶しゃれなあとホール

(世田谷区民会館別館) 4階 集会室(シリウス)

世田谷区三軒茶屋1-41-10/03-3411-6636



【電車】
東急世田谷線 または 田園都市線
「三軒茶屋」駅 徒歩3-5分
※ 駐車場はありません。

